

ラムレン河の支流白溝の源の里山にある聖宗興宗道宗の墳墓の壁畫は史料乏しい北宋の繪畫研究に貴重な材料を提供する點に於て重要なものである。

▼史學研究發表會

六月十七日、特別教室に於て岡田、柴田二氏の研究發表があつた。岡田教授は「メリー、ローラントソン夫人事件に就いて」柴田教授は「尾張藩に於ける切支丹宗門改めに就いて」の演題に依り興味深き發表があつた。學生二十餘名參集盛會であつた。

受贈交換圖書雜誌(自昭和七年四月至六月)

國學院雜誌	三八ノ五、六、七、	國學院大學雜誌部
史迹と美術	一七、一八、一九、二〇、	史迹美術同政會
國際事情	三五、三六、三七、三八、	外務省情報部
東京堂月報	一九ノ四、六、七、	東京堂
歴史と國文學	六ノ四、五、	大洋社
史論	六	白林社
社會と國體	九九	里見日本文化學研究所

國立北平圖書館彙報	五ノ五	北平圖書館
斯文	一四ノ四、五、六、	斯文會
法學論叢	二七ノ四、五、六、	京都帝大法學部
東亞	三、四、五、	東亞經濟調查局
神社協會雜誌	三一ノ四、五、	神社協會
歷史教育	七ノ一、二、三、	歷史教育會
歷史地理	五九ノ四	日本歷史地理學會
史學雜誌	四三ノ四、五、六、	東京帝大史學會
國史回顧會紀要	一〇、	國史回顧會
大正大學々報	一二、	大正大學出版部
民族學	四ノ五、六、	民族學會
社會學徒	五、六、	大正洋學會
民俗學	四ノ四、五、六、	民俗學會
立命館學叢	三ノ一〇	立命館出版部
西洋史研究		東北帝大西洋史研究會
佛蘭西大革命史	六卷七卷八卷	平凡社
Asia Major		日獨文化協會
昭和六年の國史學界		筑波研究所
獨逸史學史		岩波書店
正倉院御物古製展觀目錄		奈良帝室博物館
鳥羽伏見の變と維新史の訂正		奉公會
概觀日本文化史		弘學館
日本文化叢考	第二部 三輯	京城帝大法文學部

講座・史料

史學研究法(二六)……………小林秀雄譯
異國日記(十九)……………辻善之助校訂

朝鮮國禮曹參判 閣下、

遙賜

華箋、發緘窺

嚴意、

三宮大使不辭海陸千里之險、適來獻

貴國王殿下寶書、述

高命、賀吾

新日本國主攀其

高躅、實舊交隣盟之厚也、殊備

靈區之珍產數般、

忻納惟幸、小臣亦受芳贈、件々拜收、不罄謝辭、

別裁署印一統答書、述心緒、越略繁辭、

伏仰

自愛珍重、

星集甲子臘月 日

日本國 臣雅樂頭藤原忠世

日本國 臣大炊頭藤原利勝

回章

朝鮮國禮曹參判 足下、

遠傳

玉汗、近知

芳意、吾

新大樹源君既續

令緒主

日域、列國諸臣、繼踵入侍、君々臣々、父々子

々善哉、今也三員官使、捧

貴國王殿下詔書來、述賀禮、備異產、

領納珍重、微臣亦受數般之恩惠、且喜且愧、彌

修隣交、互無隔礙者、

公私之大幸、何事加焉、餘具在一統署印之

正當なまた時々無器用な校正、或は追加の可能を除かねばならない。假令ば古文書に於てすら、之を作製した秘書局の側の校正並に後の追加があり、また之が當然外的には同時代人の竄入の偽りの手によつたことを確實に區別することは困難である。これにはやがて他の內的標準が必要となる。ハインリツヒ・フオン・ジーベル及びテオドル・シツケルに依つて出版された皇帝文書の複寫本中の第四枚の六表にある紀元一〇〇三年二月二十三日のハインリツヒ二世の文書はこれに關する立派な例である。法王の秘書局の場合についてはヨット・フオン・ブルツク・ハルツンクが、その法王訓令、紀元一九〇一年刊第九四頁及び第九六頁に取扱ふてゐる。他方文章の不手揃な結合、或はかゝるものはどこまでも竄入であるといふ假定を満足せしめない。これは假令ばテオドル・シツケルの紀元九六二年のローマ教會に關するオットー一世の特許狀、第一一九頁に見る如くに、作者が皇帝の秘書官である場合ですら、不明になることは十分容易に現れるからである。また作者自身が後の追加によつて本來の圓滑な形を破壊することもあり得る。この場合は追加された事情、半は作者の他の文學的性質の知識、半は更に確實な決定に關して與へられた標準の他のものの援助を必要とする。特に作者がその作物を不注意に製作した場合に生じ得べき作者の輕率によつて、或は要心して取除かれねばならない他の事情によつて、之が偽りの竄入であることが結論し得られる限りは、內的矛盾の標準が之に當てはまることとなる。實際は屢々與へられた標準の一つで竄入を確實に示し得ることは、紀元十一世紀及び同十二世紀の多數の年代記に於ける女法王ヨハンナの傳説の竄入の如くであつて、之は只後世の寫本にのみあるが、その同時代の報告には發見されないのである。

先に述べた「補注」は決して之には屬しない。之はその物としては本文の手入ではないからである。然し之は輕率

な、また無學な寫手によつて、常にその根本の位置から欄外に或は本文の行を超へて本文に入り込み、而してこの場合勿論手入れを現すのであるが、その認識（こゝに何等偽作的目的のない限りはそれに必要な變化をして）は上に與へた實人の標準に従つて得らるべきである。

同様に作者の書き入れも *“Einschaltungen od. ‘Zusätze’* それに必要な變化を以て認識せらるべきである。

二、誤 謬（イルツム）

誤謬 *Irthum*（吾人が先きに述べた偽作と對立する觀念の專問的の意義に於ける）とは、或史料が何等の手入なくして全部或は部分的に、そのものが稱する所と多少違つて考へられた場合である。偽作史料によつて欺かれる場合の誤謬といふのは、この詞の普通の意義で用ひられてゐるのであつて、かく史料が詐偽的目的を有する場合の誤謬と史料が何等手入なく、また過失なくして認められる誤謬とを區別することが必要であり、かゝる偽作による誤謬を「詐偽」*“Fäuschung”* と稱する。

「誤謬」は知識及び認識の欠乏より生じ、ことに非常に屢々妄證 *Hypothese* 即ち對象に關する十分深い知識なくして一面的、或は外面的觀察によつて判定する考證より生ずる。なほ不十分な徴憑によつて完全にその史料が眞物なりや、不眞物なりやを證明し得ず、かくて研究者の意見が分れてゐる場合も之に屬する。總てかゝる種類の未決定の争は必然一方、その史料が眞實である場合に不眞と考へた人——は誤謬（この詞を既述の專問的の意義に取つて）であり、他方、その史料が不眞であるのに眞物と考へた場合は誤（この詞の普通の意義で）つてゐるのである。彼は實に詐偽を目的としてゐる史料により、間違つたのであつて、手入れのない史料を間違へたのでないのであ

る。

偽作による詐偽が總ての史料種類にその役目を奏するが如く、誤謬も同様である。吾人は種々なる現象を處理することにより、また二三の典型的實例によつて、最よくその本質及びその防禦の方法を認めねばならない。

（a）遺物の範圍では、殊に藝術の製作物が頻繁に誤謬の對象となるもので、之によつて、之が何時代に屬するか何人に關係するかを間違ひ、屢々誤つて不正と考へる。總ての藝術史はかゝる誤謬の校正に關し、また知者の判定がなほ未定に残されてゐる場合に關して多數の例を供してゐる。

殊に教訓的な、また面白い例はハインリッヒ・シリーマンのロツサリークの發掘に關する論議で、彼はこゝに殊にホーマーのトロヤの廢趾及び遺物を發見したと考へてゐたのである。ツエー・シューフハルトの今日の科學に照されたシリーマンのトロヤ・チリンス、ミケネー等の發掘（*Schuchardt, Schliemanns Ausgrabungen in Troja, Mykene usw. im Lichte der heutigen Wissenschaft* 230）を参照せよ。紀元一八三六—四一年ブーシェー・ツェルテス *Boucher de Perthes* が發掘した石器はシャル・リール *Charles Lyell* がこの五十年代に之に關係するまでは、全然洪積層人間の製作物であると考へることが欲せられなかつた。ヨット・ランケの人間 *J. Ranke, Der Mensch* 1894 卷二、第二版、第四二七頁を参照せよ。

文學的製作物の誤解も之に屬する。假令ば演説の誤つた解釋の如きはそれで、古代及び後世の歴史家が自分の作物を保存されてゐた演説の確實な復舊であるとして飾つてゐるが、之は作者によつて只狀態に相當して組立てられ、全然別な解釋の出来ない様に作り上げられたものである。また全くかゝるものとして與へられてゐる戯曲及び小説を歴史事件の確實な記述として取つた場合、或は純粹な想像的作物をば現實の比喩的裝飾であると考へた場合、詩

的作物に於ける記述、或は個々の報告をどこまでも相當な實際の事實の證據と取つて、詩的偶話及び變更を計算に置がなかつた場合等、皆同一である。

事務書類も屢々誤つて不眞のものと考へられることがある。

假令ば法王ホノリウスが、紀元六八〇—八一年のビザンツの第六回宗教大會の事務書類に従つて判定され、破門せられてゐるのであるが、法王なるものが實際曾て判定され、破門されべきことは教職制的論點から見て考へ得られないことであるといふので、この規約文はパロニウス及び他の人々の側から批難されてゐる。之についてはツエー・ヨット・フォン・ヘーフエレの宗教大會史 C. J. von Hefele, Konziliengeschichte 1877 卷三、第二版第二九九頁を参照せよ。パロニウス、スリウス等はカロロ大帝が彼の神學者に書かせた紀元七八七年の偶像禮拜に關する第七回一般學者會議の決定に對する論争的覺書である、所謂カロロ書 *Libri Carolini* なるものは、明白にカロロ大帝が教會首長に對してかゝる詞を用ふべしとは信ぜられざるが故に不眞のものであると考へてゐる。ツエー・ヨット・フォン・ヘーフエレの宗教大會史第一卷 C 第六九七頁、古代ドイツ史學會新報、紀元一八九六年、卷二一、第一六頁、殊に第九六頁にあるカー・ハムペーのハドリアン一世、第二回ニケーア宗教大會の辯護 *Hamppe, Ha drian I. Verteidigung der Zweiten nicenischen Synode usw.*——方法的に非常に興味ある論争は、紀元三四六年にあつた筈であり、またライン及び其他の市の多數の僧正の出席によつて、かの從來疑はれてゐた僧正區の成立に關する唯一の説明を與へたケルンの宗教會議の規約の眞不眞について、昔から種々に動いてゐる。エフ・ウエー・レットベルク及びヨット・フリードリッヒは、その作物ドイツの教會史 F. W. Reithberg und J. Friedrich, Kirchengeschichte Deutschlands 1846 卷一第一二三頁、また 1867 卷一、第二七七頁に烈しく之に反對してゐる。前者は考證的證據よりこの規約を後の偽作であると批難し、後者は之を眞物と考へて、考證上の矛盾が十分でないことを述べ、またことに新に發見した規約文の助によつて最後のものには

別な年代を定め得られるといふことで、サルヂカの宗教會議との衝突する矛盾を除くことによつて之を證明せんと試みた。もしフリードリッヒが正しければ、當然レットベルクの側に誤がある譯である。然し前者の反對理由は實際考證的危險を破毀するほど十分ではなく、而してこの際フリードリッヒの側の許偽を確定すべき問題が残つてゐる。ツエー・ヨット・フォン・ヘーフエレの宗教大會史卷一、第二版、紀元一八七三年刊、第六二八頁、アー・ハウクのドイツの教會史 A. Hauck, Kirchengeschichte Deutschlands 3. Aufl. 1901 卷一、第五三頁、注を参照せよ。尙最近の説明に就ては、古代ドイツ史學會新報紀元一九〇七年卷三二、第五四六頁を参照せよ。また先きの偽物の節の (a) に於けるサルヂカの法憲に關する論争をも参照することを要する。屢々肉體的遺物が一方聖者の遺骨の範圍に於て、他方古生物學の範圍に於て誤解されてゐる。

聖體及び之に對して利用される防備手段の誤解についてはパウリヌスの上記の書を参照せよ。古生物學的誤謬及び疑惑については、ヨット・ランケの人間、紀元一八九四年、卷二、第三九四頁、第四八四頁を参照せよ。

(b) 紀念物 こゝには近代まで古文書の範圍に於て明瞭に疑はしい現象の有する理由によつて完全に眞實なる古文書を不眞のものと考へる妄證によつて、幾多の誤謬が現れたものである。吾人は既に先にマビヨンが、その組織的研究によつて眞物を認識する確實な標準を作つたまでは、とかく陥りがちであつた粗漏な懷疑的誤謬について述べた幾會を持つた。實に材料が廣汎で、また複雑なので、いつもなほ誤つた妄證に陥る餘地があり、また常になほ間違つて不眞と考へられるた文書の名譽恢復をせねばならない。ユリウス・フィツケルは彼の作、古文書學研究 Julius Ficker, Beiträge zur Urkundenlehre, Innsbruck 1877—8 二卷に、かゝる誤謬の多數の史料を曝露し、深遠な方法的探究によつて不眞の徵證であるとして、とかく厄介にしてゐる中古の王の文書に於ける不規則は、秘書的職務取扱の特

殊關係に基くことを證明することによつて誤謬をさけることを教へた。

所謂フィッケルの作物は吾人の問題に關する多數の例を供する。——不眞のものとして見られてゐた法王グレゴール七世の文書が新に發見されたものによつて名譽恢復をされた面白い例は、ゲツチンゲン王立科學會、言語學史學部報告、紀元一八九七年刊、第二二六頁にあるペー・ケール P. Keim の論文にある。

寫本のみが存在する古文書を取扱ふ時には、また屢々必らず手入れをしてあるものであるが、その主要文句に於てはいふまでもなく眞物であるといふ文書を取扱ふ時には、更に甚しく研究者の判定が分れるものであり、而して之によつて、もし文書が實際眞物であるならば誰かが誤謬であつたといふ場合が生ずる譯である。

今吾人に原書の保存されていない古い法王文書の範圍に於ける、この種の多數の例については、私はテサロニカの代官支配權に關する紀元四—五世紀の法王の書翰集並に個々の皇帝の答書についての決定上非常に重要な文書を擧げる事とする。之については、ヨット・フリードリッヒのテサロニカ教會の集に關して J. Friedrich, Ueber Sammlung der Kirche von Thessalonich usw. (バイエルン王立科學會、哲學、言語學及び史學部研究、紀元一八九一年、第七七一頁) 及び之に對して、アー・デュシスネの教會領イリリクム A. Duchesne, L'Eglise de Thessalonique (ロザンチン誌、紀元一八九二年、第五三一頁) カトリック神學雜誌、紀元一八九七年、卷二一、第一頁にあるエル・フォン・ノスツツリーネック R. von Nostitz-Rieneck の論文を參照せよ。——更に私は紀元九六二年のオットーの特許狀の正眞に關する論争を擧ぐるが、この際シッケルでさへも、この文書を手入ものとして考ふるものは誤りであるといふ事を確實に證明することが出来なかつた。之についてはテオドル・ジッゲルの紀元九六二年のローマ教會に關するオットー一世の特許狀 Jn. Siebel, Das Privilegium Ottonis I. für die römische Kirche vom Jahre 962, Innsbruck

1883 及び之に對してエル・ワイランド L. Weiland の教會法に關する雜誌、紀元一八八四年、卷十九、一六二頁にある評論及びドイツ大史料の法律部四の皇帝及び王によつて公布された憲法及び法規 Monumenta Germaniae hist. Legum sectio IV. Constitutiones et acta publica imperatorum et regum 1893 卷一、第二四頁にある特許狀の出版に關する注意に於ける評論を參照せよ。また之に述べたカロルス朝の贈與狀の所に擧げた文獻及びゲー・カウフマン G. Kaufmann のゲツチンゲン學術報告、紀元一八八三年、第二三篇第七一一頁、並にヨット・フォン・ブルックハルツのドイツ史研究 Forschungen zur deutschen Geschichte 1883 卷二四、第五六七頁にある論文をも參照せよ。この場合に於て確實な、眞正な原文書に相當する性質を有する十分なる比較材料が欠けてゐるので、疑のない決定は屢々困難である。もし偽作があれば、之は常にその稱する成立時代に最も近い時代に企てられたこととなるが、然らずば之は、疑はしい場合に際しては到底有効でない事情である。——假令はマリヤ・スチュアートの函入の書狀の正眞に關する論争は特に、事情によつて複雑にされてゐる。之については、ウエー・マウレンブレツヘルによつて出版されたラウメルの歴史的袖珍本、紀元一八八二年卷一第一一九二頁にあるハー・プレスラウのマリヤ・スチュアートの函入書狀、之に對して歴史年鑑、第一八八二年、卷三、第四四五頁にあるハー・カルダウンスのマリヤ・スチュアートに關するドイツの研究 H. Cardauns, Deutsche Untersuchung über Maria Stuart の第二部、更にレビウ・ヒストリック誌、紀元一八八七—一八八九年卷三四—三九にあるエム・フリッツフソンのマリア・スチュアートの歴史の研究 M. Philippson, Etudes sur l'histoire de Marie Stuart 及び史學雜誌紀元一八九一年、卷三〇、第二四一頁にあるエツチ・フォルストのマリヤ・スチュアートの歴史研究 H. Forst, Beiträge zur Geschichte der Maria Stuart を參照せよ。

古文書殊に書翰にあつては法式書及び書翰文範、或は何等か他の方法で、單に手本として、或は文體の練習として工夫された書翰をば正眞なものゝ寫しとして考ふることによつて、全然別な誤謬の種類に遭遇する。

ウエー・ワッテンバッツハは初めて十分にこの誤謬を警告し、また之を多くの場合について證明した。オーストリア史料雜誌紀元一八五五年、卷十四、第八二九頁、オーストリアの慣例 *Iher Austriaum* なる論文の附録の中古の書翰文範についてを参考せよ。更に一般には上記の書翰文範及び方式書の文獻報告を参照せよ。教訓的な例はオーストリア史學研究會報告、紀元一八八五年、卷六、第三五九頁及び古代ドイツ史學會新報、紀元一八九三年、卷一八第一五七頁にあるペー・シェツフェル

バイホルストの中古の歴史に關する小研究 P. Schiefer-Belchert, *Kleinere Forschungen zur Geschichte des Mittelalters*.

書翰文範の中にある、かゝる文書の性質を確實に認識することは屢々決して容易でない。之はその作者が多少その書翰を製作した位置を同時代の知識によつて現實の關係に適合せしむるからである。またかゝる教本の中に採用されてゐる實際の正真なものの寫しを偽作された作物として考へるといふ、前者と反對の誤謬の危険もないのではない。かゝる文學類の立派な知識、その個々の教本及びその作者の個性に關する深い研究、並に他方時代の眞實な古文書の本質及び文體の立派な知識は兩面の誤謬を防止するものである。殊に多數の書翰及び古文書の組合せにあつては、そこに書翰製作者の統一的な、又は一面的な想像であるか、或は實際生活要求に基いてゐる書翰であるかを注意しなければならぬ。この要件は殊に明白にシェツフェルバイホルストにより、上記の論文に於て誤謬の發見に利用されてゐる。

公刊された文書も、それが莫大な材料からの單なる拔萃であることを誤解することによつて、度々誤謬を引起すことがある。殊にその拔萃が傾向なく、單に省略の爲になされ、從て只吾人には之を正當と認めねばならない場合に誤謬を引起すのである。もし報告された契約文の選擇が傾向的な目的で行はれてゐるならば、上に述べた如き偽作である。とにかく單に無邪氣に省略された選擇か、或は傾向的な選擇かを決定することは當然困難であり、實に不可能なことである。

かくてグレゴール七世の記帳の如き、その史料である秘書の帳簿が消滅し、またその中に含まれてゐた材料の極めて大部分のみが何とかして傳はつてゐるのなどは、その例で、之についてはアルノルド・シェーファー Arnold Schaefer に捧げた歴史的研究の中にあるペー・エワルドのグレゴール七世の記帳についで P. Ewald, *Zum Register Gregors VII. 古代ドイツ史學會新報*、紀元一八八六年、第十一卷のヨット・フォン・ブルックハルツングのグレゴール七世の記帳と書翰 J. von Dlugé-Hartung, *Die Register und Briefe Gregors VII. ウエー・ヤルテンのグレゴール七世、彼の傳記と事業 W. Marten, Gregor VII., sein Leben und Wirken 1894*、卷二第二九八頁、なほプロテスタント神學及び教會字典第三版、紀元一八九九年刊、卷七、第九八頁にあるツェー・メルブト C. Mehl の書いた「グレゴール七世」の項にある文獻を参照せよ。

(c) 形象的記錄 こゝには歴史的人物の肖像の變更及び誤解が屢々現れる。

かくてカロリス家の印章にある胸像が誤つてそれぞれの支配者の肖像と考へられたが、之は此等の人の印章には古代の寶玉が使用されたのであるといふことを知らない爲である。而してゲー・ハー・ベルツ G. H. Pertz はカロロ大王の印章の胸像のついでにあるアインハルトのカロロ大王傳のオクタブ版を見て、その胸像と考へたのであるが、それは實際ローマ皇帝アントニウスの胸像であつた。(エー・ミュールバッツヘルのカロリク家の記帳、第九〇頁及び第九二頁による) テオドル・シツケルのカロリス家の諸王及び諸帝の法令 Jh. Sichel, *Acta regum et imperatorum Karolingerum*, 1867 第一部、第三四七頁を参照せよ。——なほ珍しい誤謬についてはエー・ゴータイン E. Gothein がジューベル史學雜誌、紀元一八八一年新篇、卷一〇第五二六頁に注意してゐる。ギーセン大學圖書館のある油畫は一般にロイヒリンの像であると考へられてゐるので、トルロルドセンなどが之

をミニンベンのワルハラの大埋石像のモデルにしたが、之をレムブランドの「眠れる女」として知られてゐる銅版彫刻に比較するとロイヒリンと考へられてゐたものは、單にこの銅版彫刻の寫しであると考へられるのである。

(d) 言語的記錄 こゝでは、傳説の範圍に於て誤謬が恐く最も不幸な役割を奏する。吾人はこゝに誤謬が如何なる意義を以て誤られるかについては、先に述べた通りである。即ち全然歴史的事實に關する記憶を含まない神話的及び小説的物語、或は全然變更された記憶を含む傳説をば、どこまでも歴史の傳説として値せしめ、或は殆んど、更に一層不都合にも全く小説的に、また不確實に見えるものをして、只可能に見へ、或は確實らしく見ゆる個々の報告を勝手に歴史的事實として考ふる場合は誤謬である。歴史の全部がかくも誤謬によつて完全に變更され、また如何なる時期もかゝる變更を受けないものがなく、従つてかゝる誤謬の原則的認識及び方法的保護は新史學の最重要な獲得であり、また歴史材料の知識上に最根本的な變更を伴ふたといふことが出来る。之を明瞭にする爲には、只考證前時代の著名な歴史作物を一覽するを要する。この目的外である昔の時代の懷疑的攻撃は別として、ニーブールはそのローマ史に初めてかかる誤謬について原則的に反抗し、また組織的に誤謬をさける方法を開いた。ドイツの言語學者、殊にヨット・グリム、ランケ派の中世史家、古代史の範圍に於けるニーブールの後繼者、殊にモムゼンはこの認識法を更に改善した。こゝでは吾人が誤謬に陥ることなくして、どこまで傳説を歴史知識の材料として値せしめ得べきかを説明するのは問題でない。之については第四章第一節に説明せねばならない。こゝには如何にして傳説の非歴史的性質を認め、また上に述べて來た誤謬を避くべきかの方法のみを取扱ふのである。

之に關する例は非常に多數であり、また一々例を擧ぐることを見捨てねばならないほどに、非常に多く總ての人の記憶に存す

るのである。吾人は只一般にローマ傳説(アー・シュウェーグラーのローマ史 A. Schwöglar, Römische Geschichte 1893 卷一、ウエー・イーネのローマ史 W. Hine, Römische Geschichte 1813 第一卷、テオドル・モムゼンのローマ研究 Th. Mommsen, Römische Forschungen 1879 卷二、第一一二三頁、史學雜誌、紀元一八八八年、新篇卷二三第四八一—五〇六頁にあるペー・ニヤー・ローヤ建設の傳説 H. Niese, Die Sagen von der Gründung Roms (ケルメス誌、紀元一八八六年、卷二二第五七〇頁にあるテオドル・モムゼンのタチウス傳説を参照せよ) ドイツ英雄傳説 (ペー・シモンズのドイツ言語學概説第二版、紀元一九〇〇年刊、卷三第六一〇頁にある論文を参照せよ) 及び中古傳説の典型的群を示すに止る。中古傳説の考證的文献はカー・フォン・バーデルのドイツ言語學概説 K. von Bahder, Die deutsche Philologie im Grundriss 1893 第二四八—二六九頁にあり、またジョン・マイヤーのドイツ言語學概説、紀元一八九三年、卷二第一部第七七六頁にある論文を見よ。——方法に關する非常に教訓的なものは、特にゲー・クルトの書、メロビス朝の詩的歴史 (G. Kurlt, Historie poétique des Mérovingiens, Paris 1893) である。

之に關する一般方法の原則は次の如くである。その最重要なるものは一般史料考證に屬し、而して殊にこの傳説は信すべきものとして證明されるか、また如何なる程度まで信す可きものとして證明されるかの問題と結合される爲に、それぞれの記錄の最古のもので比較的最長く證明されてゐる根本の形式に、出来るだけ嚴格に遇することを要求するが、この問題の方法的な答辯は常に史料考證の任務である。問題となつてゐる記錄の外的證明についてはその内的證明が取扱はるべきであるが、こゝにも必然史料考證の原則が利用されるのである。吾人には屢々吾人の理性及び知識の立場から見て、どこまでも不可能であり、かくて幻像と考へねばならない事實の報告に遭遇することがあり、

それぞれの記録に含まれてゐる個々の事實が、吾人の從來知つて居る最良く證明されてゐる事實と矛盾してゐることもあり、また吾人は問題となつてゐる記録の中の矛盾に注目し、實に吾人はその中に時々同じ事件に關する二つ、或はそれ以上の意見が結合されて相當に眞實として結論されてゐるのを發見するが、この最後の場合に於ては更に種々なる意見に關して前後の問題を提起する機會を有する。最後に吾人はそれぞれの記録の全性質に注目して、そのものがその傳説について從來吾人に知られてゐる性質と比較して直接に傳説的のものとして認められないか、また個々の容姿が從來傳説的のものとして認められてゐるものと比較して傳説的なものと認められないかを見ねばならない。假令ばテル傳説の林檎の射落しの如き、魚の胃袋、或は鳥の巢の中から失はれ、または取去られた寶玉が發見されたといふ屢々見られる話の如きは之である。吾人はかゝる方法的鑑定を基礎としてかゝる記録を傳説的であると認めるが、その中に現れる事實の個々のものを、そのもの自身としては不可能でなく、正しく小説的でないからといふて、決してどこまでも歴史事實として考へてはならない。却てこゝにそのものの證明が一般に第五章に説明した考證の原則の標尺に従つて行はるべき更に一定の要件が附加されねばならない。實際この見解に従ふには即ち非常に多くの記録について、それが傳統的なものとして認る場合、個々の容姿が特別な理由なくしては眞實として成立し得ないことを言明し、また以前には通用した智識の立派な部分をは全然破棄するに決心するには、實に屢々相當な勇氣を要する。而して之の點については眞證的認識の進歩にも拘らず、まだ非常に缺けてゐる。然しこの點についても分を過し克服して確實な眞理に相當する以上のものを知らんと欲してはならない。

(e) 文字的記録 この範圍に於いても史料の正當な性質が時々誤解される。假令ばベー・ハー・ニツセン R. H. Nissen がマルブルクの文庫に發見した二三の皮紙によつてアルタークのカトー傳の史料の斷片を得たと考へたが、精密な研究によつて、之が多分ファミスト時代に作られた上記の傳記のラチン譯に基くものであることを示された如き、或は紀元一八二年にベチオー Peitau がリシュリウ備志録として出版した作によつて、かゝるものを有すと考へたのであるが、ランケに至つて之はリシュリウの獎勵によつて彼の時代の歴史に關する作物に集められた精査されない材料に過ぎないことが示された如きは之である。ことに中古のアンナールには屢々この種の部分的誤謬があり、外見上ある一人の作者の作物とし考へられて居るものが、深い研究によつてその全部は種々なる作者が繼續して作り上げたものであることが示され、或は反對に長い時代の作物で、或は年を追ひ、或は斷章的に書き下されたと考へられるものが、後に一息で一度に作られたものであるといふことがある。

また屢々この範圍に於ける誤謬が、全體の眞正な史料をば、ある不都合な理由から不眞のものと考へざるを得なかつたといふ様な忘證によつて生ずるものである。

かくてエム・ヨゼフ・アシバツハは (ロスイタ及びコンラード・ケルテス Roswita und Konrad Celtes 1867) ガンテルスハイムの尼僧フロトスイトの戯曲及び歴史詩をその最初の出版者、ファミストなるコンラツド・ケルチス及びその友人の作物の偽作と考へた。之は彼が紀元十世紀を全然野蠻であつたと考へ、かゝる文學的作物などは成立し得ないと思ふたからであり、また彼はこの偏見に支配されて、内容上の時代錯誤、矛盾及び他の不眞物たる徵證が發見されると信じ、また他方彼の意見では紀元一〇一一世紀の筆蹟の存在によつて間違はれないほどに、ファミスト團の精神とが、最明白にこの製作物中にたどられると考へたからである。かくて彼は之を不注意にも紀元十五世紀の偽作物と言明した。之に關してはエル・ケブケの紀元十

世紀に於けるドイツ史に於けるオットーの研究、第二カンデルスハイムのフロトスイト R. Köpke, *Chronische Studien zum deutschen Geschichte im 10. Jahrhundert, II Urosuit von Ganderheim 1869* 第二三七—二五三頁を参照すべく、それには方法的に適當な方法でアシパツハの假説が説明されてゐる。更にリュー・ワッテンバッツハの中古ドイツ史料 W. Wattenbach, *Deutscher Geschichtequellen im Mittelalter* 7 Aufl. 1904. 卷一、第三七〇頁を参照せよ。

かくて紀元十八世紀以來フリードリツヒ・バルバロッサの上イタリヤ(リグリア)に於ける事業に關する叙事詩、所謂リグリアス *Ligures* は常にラチン語の六脚韻詩よりなり、紀元十二世紀の詩人には餘りに正格であり、同時代人には根本の内容が餘に空虚に思はれ、且つ最初の出版の以前の時代の筆蹟的、或はその他の外的證據を欠いてゐるので、最初の出版者なるコンラード・ケルチスの製造物と考へられたのであるが、アー・バンネンボルグ及びガストン・ド・パリスはこの時代の他の類似せる詩作物と比較して、この作物を正眞として見た際の總ての障害は同時代の文學に關する不十分な知識に基くものであり、またリグリアスは全然紀元十二世紀の作物であること、而して他方實際之がファミストによつては製作し得られざることを示した。之に關しては史學雜誌、紀元一八七一年、卷二、六第三八六頁にあるウエー・ワッテンバッツハの説明的論文及び同人の中古ドイツ史料第六版、卷二、第二八六頁を参照せよ。

かゝる誤謬及その發見法の深遠な描寫として、更に上に類似せる一つの例を擧げて置く。ゲー・ハー・ベルツは紀元一〇七五年の勝利に至るハインリツヒ四世王の第一サクソン戰をば熱心な王側としてラチン語の六脚韻詩で書いてゐるハインリツヒ四世サクソン戰記 *Carmen de bello Saxonic Heinrich IV.* を、この詩の最初の出版時代、即ち紀元十六世紀の僞作として宣言し(古代ドイツ史學會報、紀元一八四九年卷十第七五—八六頁を参照せよ)——而して他の人々は之に賛同してゐる。勿論かの時代までばかゝる作物が存在したといふ一切の外的證據はない。之は紀元一五〇八年の皇帝の宣言 *Edicto Princeps* を除けば、只

紀元一六一—一七世紀の筆蹟で傳はつてゐるのみで、その以前何人も知らず、又は利用されてゐない。かゝる事情もまづ僞作の假定を尤もならしめるが、然しこの事情も當然決してその僞作を證明するものではない。實際屢々或史料の總ての古い筆蹟が消失してゐるといふことがあり、また殊にファミスト時代にはいまだ存在してゐた筆蹟が、そのものが印刷されたといふので公刊の際に度々消滅して居ることは、吾人の知る所である。また吾人は疑はれない正眞な立派な文學製作物が行衛不明になつたかの如く、名ざされずにゐまた知られずに存する例を十分に認めるが、さきの場合はこの詩がその王黨的傾向によつて當時の文學界の非常に有勢な僧侶的思考と反對して居つた爲であるともいはれ得る。ベルツはかゝる事情の下に自然彼の意見の積極的證據をその作物の性質と内容に取つた。即ち(一)彼は言語上、文體上及び事實上、單にファミストの作物としてのみ解釋さるべき非常な時代錯謬を發見せんと考へた。而してまた(二)彼は同時代的作物としては、その中に十分に根本的なものを含んでゐないことを考へた、ことにエル・ケプケは上記の書オットー研究の卷二、第二七八頁にベルツに賛成して更に二三の注意によつて彼の證據を援助した。吾人はこの證據を個細に十分善く知る爲に、ワイツによる最重要な反對を之と結合することとする。(デツチンゲン王立科學會研究、紀元一八七一年第十五、史學言語學部第三—四五頁に)(一)についてはベルツは言語的見地からして特に確に知られてゐる言語の構成についての矛盾をあげ、ハルツブルク *Harzburg* の代りにアルチボリス *Archibolis* ウォルステニェンセス *Vornuonensens* の代りにバンギオネス *Vangiones* 北方の町 *Urbes septentrionalis* の代りにリフヘーニ町 *Urbes Riphemungari* Ungari の代りにバルチ *Barthi* といふてゐる如きは、彼の意見ではファミストの表示法を句はしてゐるもので、紀元十一世紀のかのものは適合しないものであるといふてゐる。ワイツは二つの時期に於ける詩的語法をば十分に觀察して、かの表示法は後の時期よりも前の時期に於て多く用ひられて居り、否寧ろ一般に用ひられてゐた事を示し、かくてかの議論に反對して表現及び語法的全群がファミストには違ひして、假令ば紀元十一—十二世紀の詩人には普通である。假令は *Anteclimare* (十分

一税を取る) carnifex (殺戮者) の如き詞、また特有な専門的な意義の詞 regni primus (フリーヤートの權威) scilicet (番所) 放射名詞 *scilicet* 等を指示代名詞の代りに使用することなどがあると物語つてゐる。ペルツ及びケペケはこの詩人が古典作家の作物殊にビルデール、エネオースの作物から無數の語法、實に全體の句を取つてゐるに拘らず、この詩人の古典作家との交通を疑て居るが、ワイツは深き研究によつて初めて、どこまで之が古典作家からの借用である事、殊にその引用句の殆んどモザイク的な排列である事までを示して、かゝる作業の方法は紀元一一一二世紀の總ての類似の詩にとつての特徴であるが、フマニスト時代は古典作家よりの引用及び追憶に對する愛慕にも拘らず、全然違つてゐる殊を證明した。なほ總てかゝる紀元一一一二世紀の製作物たる叙事詩は大抵は主要停頓に韻をうむ、所謂レオンの六脚韻に作られて居り、また一般に全然かの時代の調子と特質とを有つてゐるを示してゐる。もし紀元一五一一六世紀のフマニストが紀元十一世紀の叙事詩的、ラチンの、詩のかゝる總ての特性を、かく巧に模倣する事を理解して居つて、正眞な容姿を示すほどに欺き得たとすれば、之は學術上の眞實な奇蹟でなければならず、また彼等はいかの時代には不可能な學識と正確な觀察力を有つてゐた事となる。ペルツ及び彼につぐ人々はその見解の主要な支持として事實の物語及び關係の記述に於ける所謂若干の時代錯誤を主張して居り、假令ば彼等はゴスラー・シューステル (Goslar Schuster) 等の攻撃に際して、詩人が卷一第一九七句をばその盜まれた家畜をもどす爲に大工や、麵麴屋等を出陣せしめる事を書いてゐるが、之は全く發達した手工業組合の時代に於てかゝれ得る事で手工業者の軍事的團體的出現がまた問題にならない紀元十一世紀にはあり得ない事である。之に對してワイツはこの句は全くかゝる出現を取扱ふて居るのではなく、只市居住者の不秩序な攻撃を取扱ふてゐるのと主張し、ハインリッヒ四世時代には止しく手工業者がかゝる機會に屢々市居住者の要素として現れ初めたのである事を證明してゐる。更にケペケ其他の人々は第二卷第一二二句の詞である *scilicet impia gerebanh fortia facta patrum* なる詞から追究されねばならないと考へて、戦盾の出現について非常な矛盾を以てゐる。之に反してワイツは

fortia facta patrum なる詞は簡単にビルデールから引用されたもので、中古詩人はかゝる引用に際してあくまで詞その儘をとらずしてある繪を書いた盾を考へて満足したことを注意し、またワイツはかゝるものは既に紀元一〇一一世紀にあつたことを種々なる作家の幾多の文によつて確證してゐる。更にウエルフエン家に關する古代ローマの所産の小説がこゝにカチュルスなる名と結合して現れてゐるのは更に疑はしく見ゆるが、ワイツはこの小説は以前既に紀元十二世紀に知られてゐるもので、決してフマニスト時代の偽作でないことを示した。かくして反對者の總てのこの種の考は更によき知識によつて排除された。この上にワイツは再び議論を轉じて、事實の物語に於て、また關係の復活に於て、幾多の個々の事件が後世の工案としては決して考へられ得ない様に作られて居り、ことに王軍の進軍の記述の如きは、正に然るべきことを擧げてゐる。まだ非常に博學でなかつたフマニストが常に非常に正しく時代に應じて適合し、且つ表現することは不可能であつたに相違ない。實に吾人の時代の精確な研究者にして初めて、何が時代的であるか、ないかを判定し得るだけに精密にかの時代の状態を認識し得るのであり、また吾人は吾人に提出されてゐるフマニストの歴史的作物からして彼等が中古の状態に關して、かゝる精確な知識を有つてゐなかつたことを見ることが出来るのである。次に(2)についてはペルツは、この詩人が、その材料を主としてヘルスフェルトのラムベルト Lambert von Herfeld の年代記から引用し、之を全く勝手な變更、削除、反歴史的書入によつて變形したと考へ、ケペケも之について彼に賛成してゐる。ワイツはこの考は單に皮相的な印象を現すもので、之によつてラムベルトが同じ様に詳細に同じ事件を物語つてゐるといふことが成立することを示してゐるが、然し之は十分に比較すると、寧ろ反對者が注意する以上にラムベルトとの相違が著しく實際的であり、また之が屢々作者の相違せる特有な知識に、殊にその人の感性に

ふれてゐることを認める。殊にこの詩人のサクセン戦の原因及び性質に關する全觀察はラムベルトとは全然違つて居り、吾人が明かに同時代人に認むべき非常に特徴ある方法で當時の王黨の立場を代表して居り、また更に吾人のフマニストに關する學問の智識では、この偽作に必要な、ワイツ等の深い研究によつて漸く吾人に得られたかの關係及び事件の細かい知識が、いかに非常に博學なフマニストにも不可能であつたに相違ない。最後に吾人は詩人が屢々有力な同時代人の側から個人的な記述傾向が期待されるべきであるといふ漠然たる詞を用ふるが、この抗議は排斥すべきものである。個人的な記述は全然かの中古の歴史詩の作業能力を凌駕するものであり、従つて吾人の詩人に關してもその知己なるものを期待するを得ない。この上にワイツは紀元一六一七世紀の戦記の最古の筆録及び紀元一五〇八年のエヂチオ・プリンケツフスは正字法的特性及び若干の讀み誤りを含んで居り、之が確かに兩者から本文を取つた筆録は紀元十六世紀には編纂され得なかつたのであり、却て前世紀の筆録であるか、またはかゝるものの寫本であることを證明した。紀元十六世紀にあつては何人もその代りにを有する *sepe, colere, pre, servire, nec* の代りに *nec, Tojouti* 及び *Tojeini* 等を書かず、また多少詐欺的なフマニストでも明かにかゝる特性を以て之が古い筆録を示してゐるといふ姿を呼び起さんと企てるほどの知識は有つてゐなかつた。この特性は全くこの日記が成立した紀元十一世紀の正字法に相當し、同時に直接、或は間接に最切の筆録たることを現してゐる。またこの出版物及び保存されてゐる筆録の若干間違つた讀方、假令ば紀元十一世紀の書方で現せば *vol* の代りに *et, nunc* の代りに *nec, Prosperius* の代りに *Prosperius, Jus* の代りに *viv* の如き明かにかの古い前案の後の寫手、又は植字者の讀み誤り及び間違つた説明であり、かくて之によつても紀元一五一一六世紀以前にこの日記の筆録の存在したこと、また之によつてこの時代、即ちフマニスト時代に初めて之が偽作されることの不可能なことが證明される。

同様にフマニスト時代の偽作については、エフ・フリツビが古代ドイツ史學會新報、紀元一九〇〇年、卷二カ、第七六七頁に於て僧ノルベルトのオスナブリック僧正ベンノ傳を紀元十一世紀のもの之主張せんとしたが、エル、シエツフエルボーホルストはプロシヤ王立科學會公報紀元一九〇一年、卷七、第一三二頁に於て、之を方法上教訓的に説明した。こゝでは當時普通行はれてゐた文尾の特有の韻がその正眞なることを定めて、重要な論議を決定した。更に深遠なものはハー・プレスラウが古代ドイツ史學會新報、紀元一九〇三年卷二カ第八七九頁に示してゐるもので、偽作的竄入及び訂正が存することであるが、之は彼によつて發見され、教科用ドイツ史料のドイツに關するスクリプトリースに入れられて、紀元一九〇二年に出版された紀元十七世紀の原本傳記の寫本によつて實證されてゐる。

竄入の間違つた承認もこの種の部分的誤謬としてこゝに屬すべきであり、之は不適當な標準に際し容易く現れるものである。吾人が既にこの場合には如何なる方面に注意せねばならないかといふことを指示した。殊に或作物に氣付く矛盾及び不平均をば、どこまでも偽れる竄入の標準として現すことをさなければならぬが、之は一時は至る所竄入をさがす爲めの殆んど流行的な方法であつた位で、古典言語學の範圍では大仕懸に行はれたものである。既に上に述べた如く、矛盾とか、不平均といふことは甚だ容易に他の原因から成立するものであつて、即ち作者の輕卒、或は不明により、作業の間に作物の排列或は工案の變更により、先にある節の後に前にある節が起草されたことにより、編者の輕卒な書入及び脱除により、異類の史料の利用等によるのである。時代錯誤も同様なことを生じ得る。かくて作者の人物、その研究方法及びその作物を注意して觀察して、かゝる原因を除去したる後に、初めて竄入を結論せなければならぬ。

竄入の間違つた承認の多様の例については、ゲルケの高級考證の基礎としての解剖 *A. Giercke Die Analyse als Grundsatz*

der hiesigen Kritik (イーベルグ及びリヒテルの出版にかゝる古典古代學新報、紀元一九〇一年第一部卷一第三七六頁、注一) 一、全作物が偽物の問題となつてゐるのに、時代錯誤及び矛盾の爲に竄入が承認された例は、アウクスツスの歴史的文書 *Scriptores Historiae Augustae* で、之に關しては、ヘルメス誌、紀元一八八九年卷二四及び紀元一八九二年卷二七のハー・デッサウ H. H. Dessau の論文及びラインの言語的博物館と稱する雜誌、紀元一八九四年卷四九にあるオー・ゼーク O. Seeck の論文を参照せよ。作者が第二版に際して第一版の本文を改善する爲に間違つた編入については、オー・ゼークがドイツ大史料古代作家、卷六、第一部、第一二頁にあるシムマクスの演説 *Reden des Symmachus* に指示してゐる。

誤謬を発見し、又豫め之を避くる方法的手段は總て上記の實行による、之を一般的にいふならば、眞實なものとして知られてゐる史料との十分な比較、及びそれから生ずる判定であつて、問題になつてゐる史料がそれに適合するか、或は適合しないかといふことである。この判定の要素は吾人が先に述べた偽作に關する判定の從屬してゐる四つの疑點に整理されるのであつて、若し誤謬がある場合には當然かの疑問に對して反對の答が期待されるだけである。吾人が既に知つた如く、偽作發見の際の如くに誤謬の際にも、それが時代相當のものなりや、否やを確定するには、屢々非常に十分な知識を要するもので、ある時代の各方面の知識を有する人は根本的にその史料を間違つて誤認することから保護されるのである。

吾人は特に、特有な偽作にまた單なる誤謬にも遭遇することなくして、詐偽を生ずる二三の現象を告げねばならぬ。之は特別な場合で、偽作的模倣の可能性であることを指示され、或は半は冗談に示さん爲に史料が偽作され、而してその模倣が非常にうまく行つて、作者自身が偽作を止めない間はその史料が眞物と考へられるといふ場合である。

かくてイタリア人のビートロ・ファンファニ *Pietro Fanfani* なるものがブトリントのニコラウス *Nikolaus von Butrinto* のインリツヒ七世傳のイタリア譯を紀元十三世紀の詞で作り上げ、クルスカ *Crusca* のアカデミアに提出したので、このアカデミアではこの發見物を喜んで古い散文の新なる言語的紀念物として迎へたのである。ファンファニはかゝる偽作的言語模倣の可能性を疑つたアカデミアの人々にこの可能性を明白に論辯する爲に之を行ふたものである。(史學雜誌新篇、第一八七七、卷一第九四頁にあるウエー・ベルンハルズの大論争 *W. Bernhart, der Dinstreit* を参照せよ)——かくてウセドムスのロセロウの館ウエー・ブインホールド *W. Meinhold zu Cosrow auf Usedom* が琥珀魔女 *ペリヤ・シコワイドラー* *Maria Schweidler, Die Bernsteinhexe Iselt* と標題してゐる小説をば、單に言語證據にもとづく福音書批判の不確實を證明する爲に、紀元十七世紀の傳記的記述の復舊であるとして公刊した(その再版に、また紀元一八七二年の第三版にも反覆されてゐる序詞を参照することを要する)この種の他の例はグリーベルのローマンの言語學大概、紀元一八八六年卷一第二六八頁、第二版紀元一九〇四—〇六年刊、第三四〇頁にあるトイブラーの論文である。

第二章 史料の外的決定

提出されてゐる史料の眞物であることについて何等疑の存せざる場合、吾人は先づその前後關係及び成立に關する外的狀態を決定せねばならない。之は吾人の史料の事件の證據としての價値の判定なるものは、かゝる事情を基礎として作上げられるからである。こゝに四つの要件が問題となるから、今之を順次に取扱ふこととする。

一、何時その史料が成立したか(製作時代の決定)

一、何處でその史料が成立したか(製作場處の決定)

一、何人によつてその史料が成立したか（製作者の決定）

一、その史料は獨立（原物、根本史料）のものか、或は引用されたものか（史料解剖）

一、史料製作時代の決定

史料の製作時代を出來るだけ精密に確立することは、次の二つの點から見ても重要である。即ち史料を事件の遺物として觀察する場合、その史料にその發展列に於ける正當な位置を與へることが非常に重要であり、之は全く全體の發展の解釋が個々の事實の順列如何によるからである。また史料を事實の證據物として見る場合、時代の決定が重要であつて、之はこの證據物の價值が事件とこの證據物との間の遠近關係によるからである。之については先に第四章の第三節に説明した通りである。こゝにはたゞ史料其物がその製作時代について何等の報告を與へず、或は只不定の報告を與へ、而して吾人が他の記述によつても之に關する報告を得られざる狀態に於て、方法學上の問題が起るのであり、この場合、吾人は必然間接の取扱によらねばならず、之について方法學が援助を與へるのである。

考古學及び美術史に於ては、之に屬する遺物の成立時代を決定することは常に繰返される問題であるが、文字的遺物及び文字的記錄に於ては特に屢々この問題が起る。ことに概して總ての時期に於て文學的作物は、寧ろその發表に際して日附のつけられないことが習慣となつてゐる。またある條約文、及び文書、假令ばカロルスカの勅令、他の法律、法王及び王の書翰、帝國議會及び市會の覺書等は常に日附が書かれず、或は少くとも常に日附が書かれてゐない。更に條約文及び古文書は特に屢々一つの復本或は集で傳はつて居つて、その作者が單にその内容或は形式のみに注目し、従つて自己の目的上原文の日附の報告を餘計なものとして省略することは、ユスチニヤス法典及び

法王勅令に關する無數の世俗的及び教會的法律史料集、シケロ及びブリニウス以來の書翰集、カウズドルの副本以來の書翰文範及方式書、近代に至るまでの法王、王及び諸侯秘書の副本は大低かゝるものである。而してかゝる史料については正しく時代決定が非常に重要である。總ての時期的法律史的解釋はある制度及び關係をば、それぞれの形で現してゐる法律、訓令及び特許狀等をば、どの時代に置くべきかといふことに著しく從屬して居るもので、假令ばフランク歴史の解釋がサリツク法の成立に從屬してゐる如くである。外交關係、個人性格の認識、要するに最重要な歴史事件の認識は、之に關する條約文及び書翰の正しく排列されることと著しく關係してゐる。また年代記的報告の價值も、それを同時代のものとして認め得べきかの問題に著しく關係してゐる。製作物及び他の遺物にあつても大低は只問題となつてゐる對象がそのものの屬してゐる發展列の正當の順位に置かれるといふことが最も重要であつて、この外の歴史的要件を必要としない。實に正當の位置に排列するといふことが、之に關する發展群自體の認識上非常に重要な意義を有する。藝術史及び文學史は至る所に之を誤つてゐる幾多の例を供してゐる。方法學は吾人にかゝる缺けてゐる日附を決定すべき各種の取扱の方、及び手段を與ふるものである。

この一般の方法は比較研究であつて、問題となつてゐる史料が形式、文體、及び内容上、要するにその全性質上如何なる時期に相當するかを、その種類の既に知られてゐる史料と比較することである。實に總ての時代は、その全體の製作及び表現に於て、吾人が十分に認め得べきほどに他と違つた性質を有つてゐる。然して吾人は大低は只殆んどいふ日附に到達するのであるが、もしその問題となつてゐる史料にある特殊な現象が度々現れてゐる場合は、かゝる現象の存在によりて、その成立年代をば年から日に至るまで、確實に決定することを得るのである。然してまた反

對に、かゝる現象が缺けてゐることによつて、その時限を決定する偶然の標準を得ることもある。ことに文字的史料にあつては、それが原物である場合、その文字、また時代精神を最も從順に表現してゐる言語がこの種の直接な説明を供する。書學及び言語學は常に吾人に此等の働作の絶えざる變化を教へ、また吾人はかゝる文字記號、言語形式は或言語の出現、或は消滅によつて、之を有し或は缺いてゐる史料の日附をつける確實な標準點として役立つべき正確な期限を定むる位置に置かれる。詩的形式の史料に於ても屢々この形式その物が、その成立時代の標準點となり、また散文に於ても時代によつて一定の韻的法则があつて日附を定むる役に立つものである。近來この法则の研究が審かに行はれてゐる。

吾人は度々日附のない史料をば、吾人に年代的に知られてゐる發展列、或は或史料の直接な附屬物、部分、補足基本として認めることによつてその目的を決定することが出来る。

かくして假令ばある日附のない書翰がその内容上、日附のある書翰の組合に屬してゐると思はれる場合、ある日附のない條約文が明白に時代的に確定されてゐる交渉の欠隙を補充し、若くは反對に全體の日附のない交渉條約文の組合がうまゝある日附のある條約文に結合される場合、ある日附のある大使任命が日附のない訓令に適合し、若くはこの逆になつてゐる場合、ある日附のない文書が日附のある文書の草稿、若くは實行として示される場合は之であり、近代の古文書刊行が無數の例を供する總ての場合、殊にユリウス・ワイツゼツケル *Jul. Weizsäcker* 等によつて出版されたドイツ議會文書（この内特に教訓的なものは卷四第一八頁のループレヒト王と法王廷との交渉の年代的復舊、またその卷六、第六〇七頁の種々たる貨幣法案草稿の日附の決定である）は之である。